



京都 西陣 柔道圓心道場

全日本柔道連盟審判委員会

副委員長

山崎 立実



玄関脇の細い石畳の路地をまっすぐ進み、庭を通り抜けると小さな道場があります。戦後間もなく乾蔵を取り崩して造られた五十畳足らずの道場を圓心道場と命名してくださいました恩師半島辰橋先生は、「少ない歩数で相手を崩すためには、手狭なこの道場は、本当に良い」と言っていました。

毎年、大文字の送り火の頃に畳を上げ床板も外して床下に風を通します。何年か前に秋の試合に向けた稽古のため、風通しをせずに畳を敷き詰めたまま冬を迎えたことがありました。寒稽古が始まる頃には、畳に上がるとスプリングでも入っているかのように、ぼこぼこはじめていました。

翌年の夏に床板を外すと根太や、それらががっちり受け止めるはずの三寸五分の大引が何本も折れていました。床下の湿気と稽古の衝撃で折れたのです。以来、お盆の頃になると欠かさずに風通しをしています。

床板を外すと一年間閉じ込められていた湿った空気が上がってきます。土に埋められた東石

に乗った床束が現れると、いつも「一年間よう道場を支えてくれた」と思います。

京都では幼子が六歳になった六月六日にお稽古事を始めますが、私は三歳の時にはすでに母の手刺しの柔道衣を着て大きい人の間を走り回っていたそうです。昼間は学校武道禁止令のため稽古場がない同志社や立命館の柔道部員が稽古し、夜になると地元西陣の職人さん、下鴨から「花の講道館」等の映画関係者、ちよっとおかしな取り合わせですが、大陸や南方から復員されてきた旧武専（武道専門学校）の方々や進駐軍の外国の人々などが道場の腰板がひび割れるほど激しく稽古でぶつかり合い、稽古の後は柔道のことは勿論、天下国家のこと、演劇のこと等を大勢の大人たちが夜遅くまで熱く議論している。幼い私の道場の記憶です。

道場に通ってくる今の子供たちに父良三は、「礼儀正しく」「基本に忠実に」「継続は力」と語ります。私は試合場では役職に就くことが多く、試合をしている子供の側で応援できる機会があまりありません。ですから、試合後に、

「なんで負けたのやろ」と一緒に考え、日々の稽古では「なんでそうするのか」ということを繰り返して説明するように努めています。柔道でも日々の暮らしでも、自分自身で考え、行動する力を子供たちの中に育みたいと思っています。

寝技の胡井剛一先生は、「投げられても、一本さえ取られなかったら下から攻撃して勝つ」と言われ、「人生も同じこと。命さえあれば、最後の一瞬まであきらめずに努力しなさい」と稽古の度に教えられました。

試合の前に緊張している私に森下勇先生は、「山より大きな猪はおらんよ」と両肩を強く握ってくださいました。

数年前に東のように道場を支えてきた母ゆりから道場を託された。この道場で汗を流された多くの柔道家の方々の想いを子供たちに伝えていければと思っております。



京都市警 阿部謙四郎師範より贈られた永年の風雪に耐えた角板で造られた道場額 相国寺 山崎大幹管長 筆